

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第128号

令和3年5月11日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

坂本龍馬談「西郷は馬鹿なり。大馬鹿なり。」

「西郷のことは、俗物には到底わからない！」

また、「一個の高士だもの…」と、語った勝海舟

● 西郷、下級武士から陸軍大将に ●

講談第3作は「西郷隆盛」です。

西郷隆盛は、文政10年1827、薩摩藩下級武士・西郷吉兵衛の長男として生まれ、28歳で島津斉彬の庭方役に抜擢され、江戸末から明治初めにかけて活躍した稀有な政治家です。

持ち前の自然児的な感性で動くため、2度の遠島生活も経験します。しかし、時代は、九州の風雲児、西郷隆盛を必要とし、明治政府の参議・陸軍大将にまで上り詰めますが、征韓論に敗れ、鹿児島に帰った西郷は、最後賊軍となって西南戦争を戦い、城山で自決するという、51年の生涯を送っています。

講談「西郷隆盛」は、田中惣五郎「西郷隆盛」（人物叢書・吉川弘文館）を原作に、文藝春秋「西郷隆盛を知る」（平成29年12月特別増刊号医・永久保存版）を参考に、扇谷が脚本を書いたものです。

脚本全文は<http://nawate-kyobun.jp/>に掲載。

明治維新の功罪両面を最もよく見た男

楠正行の会、講談調講座は、足利直義、児島高德に次いで、第3作目、西郷隆盛と相成りました。

調子に乗って続けてきましたが、明治維新を動かした張本人であり、明治維新の功罪両面を最もよく見た男、西郷隆盛について語ってみたいと思います。どうぞ、最後まで、お付き合いのほど、よろしくお願いします。

西郷隆盛ほど、波乱に富んだ人生を送った人物はいな

いといえるでしょう。

20代後半まで、薩摩藩の小吏、乃ち地位の低い役人であった人物が、わずか20年後、46歳にして明治新政府の首相兼陸軍元帥・近衛都督に上り詰め、そしてまた、そのわずか5年後の51歳にして賊として討伐され、悠然と死にいた生涯という、まるでエレベーターで急上昇・急降下するような生涯を送っているのです。

人物叢書の著者、田中惣五郎が言う西郷隆盛像は、以下のとおりです。

『西郷の偉いところは、私心がなく、愛情に豊かであった上に、純粋に藩主に仕え、国に尽くし、農民を愛し、そして友にも後進にも、父母にも妻子にも、豊かな愛情を捧げ、いわば生一本な自然児的存在であった』と。

だから、打算が働かず、他人を疑わぬ正直者が故に、つまづいて二度も流罪になっているのです。

貧しいが、身体は丈夫な一家に育つ

文政10年1827、薩摩藩77万石城下町の鹿児島を流れる甲突川ほとりの鍛冶屋町に、その産声を上げました。

父、九郎は150石以下を与えられる小姓組勘定方小頭で、まずは安定した生活が送れるはずでありましたが、吉之助以下6人の兄弟がおり、西郷家も相当貧しかったようで、一枚の布団を引っ張り合って寝たという西郷の懐旧談が残っているぐらいです。

しかし、西郷家は貧しくはありましたが、この家の人はそ

ろって肉体的には恵まれていました。

これは父祖伝来であり、五代の祖、吉兵衛は身長 6 尺あまり、約 182 cmもあり、腕力絶倫といわれ、江戸時代の力士九紋竜の小結時代に、これと引き分け相撲を取ったとの逸話が残るほどであります。江戸時代の 182 センチの身長といえ、よっぽどの大男だったでしょう。

西郷もまた堂々たる体格で、身長 5 尺 9 寸あまり、今でいうと 178 cm 77 mmの身長で、体重は 29 貫あまりというから、これも今でいうと約 110 キログラムの巨漢でありました。加えて巨眼重瞳で、太い眉毛と引き締まった口許は正に偉丈夫といえました。この体格は、西郷の生涯に大いに幸いし、封建的英雄主義の時代には指導者としての第一条件であったのであります。

西郷は 8 歳、9 歳のころから、藩の聖堂に通って読み書き・そろばんを学びましたが、体の大きい無口の気の利かない少年として扱われた、といわれています。要は喧嘩に強い鈍重の型であります。

仲間には、2 歳年下の竹馬の友、大久保正助、のちの利通、他には有村俊斎、吉井幸助らがあり、議論にたけていたのが大久保で、西郷は黙々と大久保の論に耳を傾けていた、というのです。

こおrikatakakiyakutasuke

そして 18 歳の時、郡方書役助になり、当時記した西郷の農政意見が残っています。

享保年中に行われた検知では、もし高が増えたら村の所有高にするのお触れであったので、農民はできる限り高が多くなるよう測量して報告した。が、検知が終わると、その増し分は藩の支配にしてしまって、大いに民心を失った。

この度、検知を断行し、民苦を取り除かれることはまことに結構な事ではあるが、今の役人では、いろいろ不公正なことをして私腹を肥やすことになる。

この場合、永年の弊風を除き、満潮の人身が改まって、清廉の風が行われて後に行うのでなかったら、結局は無意義に終わり、万古にわたって光を放つ政治は行われまい。

西郷の、このような「制度より精神」という考え方は、彼の一生を通じてのことでもあります。西郷の愛民・愛農の思想は、島流しの時代や征韓論に敗れて下野したのちの晩年にも現れ、廃藩後の鹿児島を、農民第一主義の古風な

県に仕立て上げ、西南戦争の原因にまで持ち込んでしまうのであります。

兄を支え続けた吉次郎

島津斉彬と久光を取り巻く人々による家督争いの「お由良くずれ」で一掃された斉彬派でありましたが、幕府が乗り出し斉興の退隱を諷し、嘉永 4 年 1851 の 2 月に斉彬が藩主の地位につくと、藩の立て直しに動いた西郷・大久保らのグループが生まれるのであります。

しかし、この翌年の嘉永 5 年 1852 は、西郷にとって、人生の中で最も悲しい 1 年となりました。

祖父龍右衛門の死に続き、9 月には父吉兵衛が、さらに 11 月には母が他界したのであります。

西郷の末弟、小兵衛はまだ 3 歳の幼児でありました。貧しい西郷家にとって、悲嘆にくれる中、重なる葬儀の費用は耐えがたい負担であったことでしょう。しかし、兄弟間の仲睦まじさは有名で、特に、長弟の吉次郎は兄思いで、世事にたけていたので、西郷は吉次郎を信頼し、年は下だが「お前は兄だ。」と言いとおしたと伝わるほどです。

西郷が、家のことを忘れて、国事に奔走できたのは、一つには吉次郎の人柄によるところが大きかったといえるでしょう。

28 歳の偉丈夫な西郷、斉彬の庭方役に

さて、藩主となった斉彬は、嘉永 7 年 1854、藩主就任最初の参勤交代の出府の年、西郷は中小姓にとり挙げられ、晴れの行列に随うこととなります。この行列が藩境の水神坂上で休息したとき、斉彬は、初めて西郷を引見したのです。

この時、斉彬は 28 歳の偉丈夫な西郷に大変満足したのと思われまふ。出府の翌月、斉彬は西郷に「庭方役」を命じています。斉彬の非公式な密事を取り扱う秘書的な役目で、中小姓からいきなり斉彬の傍衆に取り上げられ、西郷、最初の仕事は水戸との連絡でありました。

そして、この頃、西郷が藤田東湖と面会した感激を、次のように語っています。

— 東湖先生宅を訪問すると、まるで清水の中に浴したような塩梅で、心中一点雲霞なく、ただ清浄なる心になり、帰路を忘れてしまう。

(文責『四條驛楠正行の会』代表 扇谷昭)